

研究所報

目次

研究所の意義を想う	1
1994年度「指定研究」	
研究計画紹介	2
1993年度「指定研究」	
研究経過報告	3
1995年度「一般研究」	
選考結果発表	10
1995年度「一般研究」	
研究目的紹介	11
学会参加報告	16
開放セミナー	19
彙報	24

研究所の意義を想う

大谷大学 学長 訓 覇 曄 雄

研究所が学外に移転してから3年近くが経過した。大学改革の流れの中で国際文化学科の新設という事態により、臨時的措置として研究所は学外に移転したのであるが、折々に研究所の意義の確かめは必要であろう。

研究所の設立当初に比べて、大学を取り巻く環境はかなり変化してきた。カリキュラムの大綱化に象徴される大学改革の流れの中で、私立大学はその建学の精神が問い直され、自己点検の眼を持つことを求められている。しかし、このことは研究所では、ちょうど十数年前の設立以来、その意義や「真宗総合」の意味を繰り返し問い直す中で常に問題としてきたことでもある。大谷大学がその建学の精神にのっとった大学として機能し続けるためには、大学を構成する者たち自身が教育と研究において不断に大学の質を問い続けなければならない。そのための場となると研究所の存在意味があると思う。自らの学科や専門という狭い枠に閉じこもりがちな我々が、教育と研究において、仏教を核にしながらか人間を総合的に捉えることを確認する場となるのである。そのために、研究所は専任の研究員を置かないというユニークな体制をとっている。これらの狙いが十分に効果を発揮するためには、研究所が学内にあって、手軽に行き交うことが必要であろう。現在、臨時的措置とは言え、研究所が学外に移転し、しかもその期間が長くなることのマイナスは決して小さくないが、研究所そのものの意義はいささかも変わるものではない。ただ、おおかたの意義の中でその存在感が薄れてきているとすれば、それこそあってはならないことであり、改めてその存在意義を喚起しなければならないと思う。

大学はどうあるべきか。このことはまず、社会との関わりの中で考えられなければならない。今、社会は大学に対して、情報・国際化・生涯学習の三つの面にわたって対応を求めている。本学も仏教を社会に開放するという建学の精神に基づきながらこれら社会の求めに応じて

いかなければならない。このことに関して、研究所は現に大きな役割を果たしていると思われる。研究所の指定研究のうち、「大学史編纂研究」は、本学の歴史を明らかにする中で、本学のアイデンティティーや建学の精神を明確にしようとしている。「国際仏教研究」は、真宗・仏教関係の欧文文献を収集整理し、海外の研究者との交流や研究発表の場として、本学の国際交流の拠点の一つとなっている。また、「西藏文献研究」は、チベット語文献を電子化するためにパーソナルコンピュータのマッキントッシュ用のシステムを開発中であり、以後、これを用いて本学所蔵のチベット語文献やその目録を入力していくようである。今後は、各研究で収集・整理・作成される文献情報は、新しいメディアを用いてシステマティックになされ、内外の利用に支え得るものでなければならぬが、西藏文献研究の仕事はその方向の先駆となるものであろう。これらはいずれ、現在構想中の本学の「情報センター」が完成した暁には完全な形で実現することであろう。また、4年余り続けている「開放セミナー」は大学を社会に開放し、生涯教育の一端を担うべく企画実施されているものである。

以上、二三の例によって見てきたように、現在、研究所で行われている研究活動は、それぞれに、いま大学が直面している課題に学問研究の場で応えるという意味を持っている。このような方向は、今後さらに領域を広げつつ自覚的に展開されなければならないであろう。また、その意義が大学全体に浸透し、教育の場へも還元されてこなければならないであろう。この点が研究所設立時に最も留意したところであった。教育の場から出た課題が研究所へ、そして研究所の成果が教育の場へという循環がスムーズに行われてはじめて、研究所はその存在意義を発揮したといえるであろう。この流れを阻むものを取り除き、流れをスムーズにする努力を重ねつつ、あるべき研究所へと前進したいものである。

1994(平成6)年度「指定研究」研究計画紹介

1994(平成6)年度の「指定研究」の研究計画および研究組織が、真宗総合研究所委員会において審議され、下記のように決定した。

今年度の「指定研究」は、前年度と同様に特定研究に「大学史編纂研究」と「国際仏教研究」の二件が、委託研究に「真宗史料研究」「西藏文献研究」「大蔵経学術用語研究」の三件が承認された。「大学史編纂研究」は福島光哉教授をチーフとする明治期の研究が一応終了し、今年度からは武田武麿教授をチーフとして大正期の研究に移る。「真宗史料研究」はチーフが大桑斉教授から名畑崇教授に代わり、引き続き東本願寺の未公開の重要史料の整理を行う。

研究名	研究課題及び研究組織
特定研究 大学史編纂研究 代表者 学長・訓覇 嘩雄	研究課題 「近代における大谷大学の成立と展開の研究」 研究員 武田 武麿 (チーフ・教授) 神戸 和麿 (教授) 佐々木 令信 (教授) 友田 孝興 (教授) 福島 光哉 (教授) 延塚 知道 (助教授) 三明 智彰 (助教授) 宮崎 健司 (専任講師) 藤田 昭彦 (所長・教授、但、9月30日まで) 片岡 了 (所長・教授、但、10月1日より) 兵藤 一夫 (主事・助教授) 研究補助員 稲葉 広由 (大学院博士課程満期退学) 星名 万美 (大学院博士課程)
特定研究 国際仏教研究 代表者 学長・訓覇 嘩雄	研究課題 「諸外国における仏教受容の様相の研究」 研究員 多田 稔 (チーフ・教授) 藤田 昭彦 (教授) 安富 信哉 (教授) 宮下 晴輝 (助教授) 加来 雄之 (専任講師) 樋口 章信 (専任講師) Robert F. Rhodes (専任講師) 渡辺 啓真 (専任講師) 片岡 了 (所長・教授、但、10月1日より) 兵藤 一夫 (主事・助教授) 研究補助員 池田 真 (大学院博士課程) 安武 智丸 (大学院博士課程)
委託研究 真宗史料研究 代表者 学長・訓覇 嘩雄	研究課題 「東本願寺近世近代史料の整理ならびに『真宗史料叢刊』の刊行」 研究員 名畑 崇 (チーフ・教授) 大桑 斉 (教授) 木場 明志 (助教授) 草野 顕之 (助教授) 嘱託研究員 上場 顕雄 (本学非常勤講師) 福島 和人 (本学非常勤講師) 西田 真因 (真宗大谷派教学研究所有員) 谷端 昭夫 (本学非常勤講師) 研究補助員 上杉 義麿 (大学院博士課程) 服部 了潤 (大学院博士課程) 平野 寿則 (大学院博士課程)
委託研究 西藏文献研究 代表者 学長・訓覇 嘩雄	研究課題 「大谷大学所蔵の北京版大蔵経及び蔵外文献の文献研究」 研究員 小川 一乗 (チーフ・教授) 片野 道雄 (教授) 小谷 信千代 (助教授) 白館 戒雲 (助教授) 兵藤 一夫 (助教授) 嘱託研究員 今枝 由郎 (フランス国立科学研究センター主任研究員) 研究補助員 高田 順仁 (大学院博士課程満期退学) 福田 琢 (大学院博士課程満期退学) 加藤 秀樹 (大学院博士課程)
委託研究 大蔵経学術用語研究 代表者 学長・訓覇 嘩雄	研究課題 「『大正新脩大蔵経』宝積部関係典籍における学術用語の研究」 研究員 鍵主 良敬 (チーフ・教授) 木村 宣彰 (教授) 古田 和弘 (教授) 一色 順心 (助教授) 織田 顕祐 (専任講師) 山野 俊郎 (専任講師) 研究補助員 加藤 不二夫 (大学院博士課程満期退学) 長沢 円 (大学院博士課程満期退学)

1993(平成5)年度「指定研究」研究経過報告

特定研究

大学史編纂研究 —近代における大谷大学の 成立と展開の研究—

研究員・チーフ 福島 光哉
(仏教学)

「大学史編纂研究」は、1985年以来続けられた「真宗学事研究」における過去9年間にわたる研究成果をふまえ、具体的に大学史編纂業務に着手すべく1991年にあらたに発足した特定研究である。

研究課題は、「近代における大谷大学の成立と展開の研究」であり、これまで3年間、福島光哉教授(仏教学)を研究員チーフとして研究を進めてきた。

1993年度は、前年度に引き続き、明治期の大学組織や教学史の略述と略年表作成という課題を大きな柱として研究を行ったが、この3年間の研究成果を各研究員が論文としてまとめるために執筆分担を決め、福島チーフまで提出すべく準備を進めた。会議ならびに研究会は下記のようにとりおこなった。

1993年

- 4月20日(火)12時 博綜館第1小会議室
議題 大学史編纂研究班研究室の移転について
- 5月28日(金)17時 大学史編纂研究室
議題 今後の研究計画について
- 6月29日(火)16時30分 大学史編纂研究室
研究会
発表
「明治初年に於ける大谷派学校組織」
助教授 三明智彰(研究員)
「明治期学事略年表の作成について」
専任講師 宮崎健司(研究員)
- 11月10日(火)16時10分 第一研究室分室1
議題 各研究員の分担の確認

1994年

- 2月11日(金)13時30分 第4小会議室
議題 今後の研究計画について

- 3月14日(月)20時30分 第一研究室分室1
研究会 各研究員提出の原稿について
- 3月22日(火)16時30分 第一研究室分室1
研究会 各研究員提出の原稿の検討会

1994年度は、研究員チーフに武田武麿教授(宗教学)が就任。前年度の研究の完成とともに、いよいよ大正期に於ける本学の組織・教学史略述、略年表作成のための研究にとりかかる。

大正期には、大学令による「大谷大学」発足、佐々木月樵学長「大谷大学樹立の精神」の告示、京都学派等新進気鋭の人材の招聘、「真宗学」の名称の成立などがあり、本学にとっては、明治期の課題を承け、昭和期の展開を生み出す重要な時期である。

今年度の研究目的・意義を次のように確かめ、研究に着手した。

近年、各大学で「大学史」編纂が活発に行われている。それらの多くは、大学の歴史の節目に記念事業として取り組まれることが多い。しかしながら、「大学史」とは、単に大学の過去を掘り起こすものであってはならない。大学の過去と現在と将来とを展望する問題意識をもって編纂されるべきものである。そのような大学史が編纂されることによって、建学の目的や理念が大学の歴史を縦に貫いていることを確かめることになるのである。また、それこそは、本学の新たな改革の指針をも示すことになるであろう。

遅滞することなく課題を達成して行くために、鋭意研究を進めて行きたい。(三明記)

特定研究

国際仏教研究 —諸外国における 仏教受容の様相の研究—

研究員・チーフ 多田 稔
(国際文化学)

これまでの二年間の研究に基づき、本研究班は、「仏

教を通じての東西の文化的対話」を主たる研究テーマとして研究をすすめてきた。当該年度は、本学で国際真宗学会第6回大会(The Sixth Biennial Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies)が開催されることが決定していた。本大会は、本学で開催されるはじめての真宗に関する本格的な国際学会であり、宗門の協力を得ながら、全学をあげて大会の運営に取り組むことになった。本研究班も、二年間の対話のための研究を実現するまたとない機会として積極的に関わることになり、本研究班からは、多田稔教授(研究員・チーフ)、安富信哉教授(研究員)、宮下晴輝助教授(研究所主事・研究員)、加来雄之専任講師(研究員)、ロバート・F・ローズ専任講師(研究員)が大会実行委員会のメンバーとして参加した。また嘱託研究員の樋口章信講師も積極的に協力した。

大会の詳細については、研究所報No.31に報告されているが、その発表者だけを見ても、本大会は世界の真宗研究の主たる研究者が一堂に大谷大学に集まったことがおわかりいただけよう。発表者は7ヶ国の出身者にわたり、仏教関係の研究者のみならず、キリスト教の神学者の立場から、哲学者の立場から、歴史学者の立場からなど、さまざまな立場・関心から親鸞の思想へのアプローチがなされ、仏教を通じての対話のために、これ以上ない恵まれた機会となった。

ただ、宗教研究というものは単なる学問的研究にとどまりうる筈のものではない。その研究は、そのまま主体的求道、自己のIdentityの確立につながるものでなければならず、また自己の体験的事実の客体化されたものでなければならない。このように、宗教的研究における対話は、独自の検討すべき課題をもつ。このような課題をうけ、真宗という限定されたテーマの中ではあるが、今日の宗教的多様性の中で、宗教的対話のための場をどのように実現するか、また対話をどのように意義あるものとするかが、本大会において問われたのである。

本研究班では、上記の課題に答えるため、これまで行ってきた主に各個的な交流を中心とする対話のあり方にくわえ、大学、もしくは研究所というレベルでなされる文化的交流、思想的対話の方法を検討した。また大谷大学の人的・歴史的資産を海外に紹介し、海外の仏教受容の様相を多角的総合的に知る機会として活用する方法に取り組んだ。ともかく本研究班は、二年間の研究と、研究員を海外の学会に積極的に派遣した経験を通して、国際

的対話が、長い射程をもった高く広い志と理念、見識、と同時に、翻訳・通訳・伝達などの実に堅実で地道な作業をも必要とすることを充分理解せねばならぬことを肝に銘じ、そのことを大会運営に反映させるところがあったと信じる。

大会前には、いくつかのパネル発表者の論文を基に検討を行い、またパネル・テーマにそった資料の収集を行った。発表者が事前に来日した場合には、発表者を交えてパネル・テーマに基づいた少人数による研究会も行った。また公開講演や発表者のアブストラクトなどの翻訳作業を積極的に行った。

大会後は、大会をどのように総括するかについて研究班全体の課題として検討した。この結果、国際真宗学会第6回大会のプロシーディングの作成、並びに大会を総括的にまとめた報告書を作成することが必要であるという意見が出され、それらの製作をもって研究成果とすることが確認された。この成果については、本年度から早速準備をはじめたのであるが、諸般の事情で次年度に引き継がれることになった。

また人的交流という側面では、現在も大会の発表者・参加者との継続的な連絡がはかられている。

上述の研究に加え、本年度も、初年度の計画に基づき以下の基礎的研究を継続的に行った。

- ・研究員による定期的な研究会
- ・海外の研究者を招いての研究会
- ・海外の学会への研究員の派遣
- ・資料収集とデータベース化

【研究員による研究会】

- 4月21日(木)12時10分 博綜館第1小会議室
講題 今年度の課題について(1)
ジャーナルについて(1)
- 5月12日(木)12時10分 博綜館第1小会議室
講題 今年度の課題について(2)
- 6月2日(木)12時10分 博綜館第1小会議室
講題 今年度の課題について(3)
- 6月16日(木)12時10分 博綜館第3会議室
講題 今年度の課題について(4)
ジャーナルについて(2)
- 7月7日(木)12時10分 博綜館第1小会議室
講題 研究成果のまとめについて(1)
- 10月6日(木)12時10分 博綜館第1小会議室

議題 ICANAS 参加報告(宮下晴輝・桂華淳祥・加来雄之各研究員)

11月10日(水)12時10分 博綜館第1小会議室

議題 世界宗教会議参加報告(多岡稔研究班チーフ、安富信哉・樋口章信研究員)

12月1日(水)12時10分 博綜館第1小会議室

議題 研究班成果報告について(2)

1月12日(水)12時10分 博綜館第1小会議室

議題 研究班成果報告について(3)

3月14日(月)10時30分 博綜館第1小会議室

議題 研究班成果報告について(4)

【海外の研究員を招いての研究会の開催】

4月23日(金)18時 真宗総合研究所

研究懇談会「ムボンド氏を囲んで」

5月10日(月)16時10分 博綜館第4会議室

テーマ「The Reflection on Contemporary Shinshu」

講師 ジェラルド・E・クック博士(元バックネル大学教授)

6月4日(金)16時30分 博綜館第4会議室

テーマ「北アメリカの宗教学に関して」

講師 レスリー・河村博士(カルガリー大学教授)

6月29日(金)17時30分 博綜館第4会議室

研究懇談会「ジョン・ロス・カーター博士を囲んで」

10月18日(月)16時 博綜館第4会議室

テーマ「インドにおける瞑想について」

講師 Dr. Nathmal Tatia (Jain Vishva Bharati Director)

10月22日(金)16時10分 博綜館第4会議室

テーマ「中国の宗教現状と宗教政策」

講師 胡 振華教授(中央民族学院)
通訳 劉 建氏(本学非常勤講師)

12月9日(水)16時 博綜館第4会議室

テーマ「スリランカにおける仏教研究の現状について」

講師 Prof. Oliver Abeynayake (真宗総合研究所客員研究員・Director of Research, Buddhist and Pali University of Sri Lanka)

12月10日(金)15時 博綜館第4会議室

テーマ「芭蕉の宗教世界」

講師 Prof. David Landis Barnhill (真宗総合研究所客員研究員・Guilford College North Carolina Japan Center)

【海外の学会への研究員の派遣】

The 34th International Congress of Asian and North African Studies

8月22日から28日まで、香港において、第34回国際アジア・北アフリカ研究会議(ICANAS)が開催され、国際仏教研究班の宮下晴輝、桂華淳祥、加来雄之研究員が参加した。

1993 Parliament of the World's Religions

8月28日から9月5日まで、アメリカのシカゴにおいて、第1回世界宗教会議の百周年記念会議が開催され、国際仏教研究班の多田稔研究員、安富信哉研究員、樋口章信嘱託研究員が参加した。

所報No.31に安富研究員・樋口嘱託研究員による報告がなされている。

1993 AAR/SBL Annual Meeting

11月20日から23日まで、Washington, D. C. で、1993年度アメリカ宗教学会年次大会が開催され、国際仏教研究班のロバート・F・ローズ研究員が参加した。

イギリスにおける仏教研究の調査

国際仏教研究班の多田稔研究員は、イギリスにおける仏教研究の調査と資料収集のため、1994年3月16日から30日まで、イギリスのロンドン大学、ロンドン仏教会、ランカスター大学、オックスフォード大学等を訪問し、現状の調査と研究者との交流を深めてきた。

委託研究

真宗史料研究
—東本願寺近世近代史料の
研究と翻刻並びに出版—

研究員・チーフ 大桑 斉
(国史学)

この研究プロジェクトは、(1)真宗大谷派の近世近代を窺う未公開の重要史料群である「園林文庫」を整理し、目録を作成すること、それを通じて発見される主要史料を、大谷大学図書館所蔵の関連史料並びに同館に寄託されている東本願寺記録所文書などの重要史料と合わせて、(2)史料集(仮題『真宗史料叢刊』)に編纂し、刊行すること、を目指している。本年度においては、過去2年と合わせて(1)の作業は全体の約4割を終了し、(2)史料集編集は、第1期全体プランの決定と原稿作成において、相当の進展が見られた。

(1) 「園林文庫」整理

1953(昭和28)年緊急作成の『園林文庫調査目録』(仮目録)に基づき、照合と内容確認、新たなカード作成という作業は、昨年度と変わらない。仮目録には「何々一件一括」などと記されているが、実際には数十点の文書が含まれており、それを一点ごとにカード化するのであるから、作業は容易にはかどらない。古文書が読めるということが作業員の必須条件であり、学内外からその条件を満たす人員を総動員し、さらには博物館学課程で古文書読解の手ほどきを受けたばかりの学部学生まで動員して、なんとか必要人員を満たしているのが、現状である。特殊能力を要するアルバイトでありながら、それに相応する報酬規程がないということが、一つのネックとなっている。

「園林文庫」の整理は、単に目録を作成するだけでなく、重要史料の確認と研究をも含んでいる。その内容は、先年度の報告でも触れられているように、達如・巖如両上人の手元にあった史料が中心であるから、従来全く存

在が知られていなかったものも多い。このうち本年度は「園林文庫蔵明治五・六年建白書——教部省体制と大谷派——」と題して長遊界・篠塚不着・笠原研寿・南条文雄らの建白書を、研究補助員熊野恒陽・上杉義磨の努力によって紹介することができた(真宗総合研究所研究紀要11号掲載)。差し出されたものの封も切られずに放置されていた新史料で、この時期の教団史が、教部省との関連において内部の課題を抱えて展開していたことが明らかになった。すなわち、教部省に掌握された布教権・末寺統括権を教団側に回復するとともに、それに対応した教団の宗制機構整備が課題であり、それを巡っての葛藤があったのである。

作業の進捗状況で言えば、この3ヶ年で182箱の内55箱の整理が終り、仮目録所載の2,195点の史料が約六倍の12,521枚のカードに書き換えられた。箱の数ではほぼ三分の一、史料点数では全部で5,190点の内の43%が終了したことになる。従って今後の見通しとして、期間にしてあと3~4年が必要で、総カード数3万6千枚という概算になる。作業員の習熟と共にピッチが上がるであろうが、一方で難問も出てくる。史料の種類が当初の予想と大幅に異なり、ある偏りを持っていることから、オールラウンドな史料群を予想した分類表との間だに不適合が起り、分類表そのものの再検討が必要となった。分類表を改訂すれば既に分類を済ませたものを再分類しなければならなくなるので、それを最小限に抑えつつ、十全なものにしなければならない。これらは、コンピューター処理を行いたいが、その要員の確保がこれまた一つの難題となっている。

(2) 史料集編纂準備状況

史料集編纂準備は、『真宗史料叢刊』(仮題)第1期の刊行計画を策定する所まで進展した。内容は原稿作成状況と合わせて紹介すれば以下ようになる。

(1) 『東本願寺家臣総覧』

東本願寺家臣の全系譜と経歴の総覧で、付録索引を充実させて東本願寺史料研究必携の性格を持たせる。索引付録1冊と合わせて全2冊の予定。約750枚(400字詰原稿用紙換算、以下同じ)の本文原稿がほぼ出来上がり、入稿のための原稿整理に入っている。

(2) 『申物帳』

大谷派寺院の寺号・御影などの下付申請の記録で、江

戸初期から維新时期迄の全期間にわたる大谷派寺院史の基礎史料。図書館所蔵粟津家記録の江戸初期分21冊(約2500枚)のみ完全翻刻(2冊を予定)とし、それ以降の本願寺記録所文書中の84冊は一覧表形式を取る。一覧表の部分は約6万項目で5冊を予定し、全7冊の予定。前者の分の原稿がほぼ出来上がり、地名寺名などの確認作業段階にある。

(3)『粟津日記』

図書館粟津家記録所蔵の東本願寺家老粟津家の日記で、江戸初期の万治2年から明治元年迄の全翻刻。宗政の基礎史料。原稿4500枚が出来上がり、残り約1500枚と予想され、合計6000枚。5冊予定。

(4)『恵空著作全集』

大谷派初代講師恵空の全著述を翻刻。江戸教学の規準を明らかにする。原稿にして8千から1万枚と予想され、全10冊か。

(5)『幕末維新日記集』

達如・厳如など幕末維新时期の法主の日記の重要なものを選んで翻刻。教団史の近代への対応の基本史料。冊数未定。

(6)『近代の親鸞像』

近代人の親鸞理解を示す文献の重要なものを集成する。近代真宗思想史の基本史料。冊数未定。

このうち、(1)(2)(3)は原稿作成が進展を見、94年度の秋から冬にかけて印刷に入るところまでこぎ着けた。(4)は対象文献リストアップからその現物の収集段階であり、(6)は文献年表の作成がほぼ終り、収録文献の選定作業段階である。(5)は諸般の事情から着手が遅れている。

出版の原稿作成は同時に研究作業でもあり、例えば(1)『東本願寺家臣総覧』は各種の家臣系譜の相互対比、その成立事情や先後関係の決定など文献学的研究が必要であり、そこから様々な新見が得られた。現在重宝されている旧宗学院編の『東本願寺家臣名簿』がその凡例に史料として掲げる『家老名簿』『三代相恩調書』『歴代朝通控』は、調査の結果各々に数種の別本が存在することが明らかになった。『家老名簿』とは『御家中系譜』(稲葉家記録4-3)『家臣系譜』(稲葉家記録4-2)『侍衆控』(稲葉家記録3-4)『家臣系譜』(稲葉家記録4-4)無題の系譜(園林文庫54-18)『家中補任』(園林文庫54-19)などの総称であった。これらが一体どのような相互関係にあるかは、容易に決し難く、目下その検討が進められている。それらが作成されたのは朝通とい

うことと密接な関係を持っている。『歴代朝通控』も一つの記録の固有名詞ではなく、それらの諸記録の総合名称であり、上記の『家老名簿』も広義にはこれに含まれるが、園林文庫にある、例えば『天正元年御通』『朝通家名並系図』といった類のもので、相当の量が存在する。いわゆる『家老名簿』はこれらの集成とも言えないことはない。既に天文年間から見られた「朝通」ということが家臣の家柄の格付に重要な意味をもっていたのである。また家臣団の内でもこれを巡る抗争があったことなども新しく判明してきた。これらを盛り込んでの新しい年表等が付録として加えられよう。さらには家臣を検索するための索引も、コンピューターの使用によって、名乗のみではなく官途名や通称でも検索できるようにすることが考えられている。

また『三代相恩調書』とは、明治4年の廃藩置県に伴う封建家臣団解体、秩祿公債交付にあたり、本願寺でも三代以上に互る家臣の由緒書き上げが作成され、京都府庁に提出されたものである。しかるにこれには、記録所文書に残された控、京都府庁に提出された本のほかに、園林文庫にも控が1本残されていることが判明した。これらは、本来同一記録であり、一致すべきものであるが、相互に相当の出入りがあり、どの本をもって定本とすべきか判断に迷う。現在諸本対校を行いつつ原稿整理を進めている。

以上、目に付くところを拾い上げ、おおよその進行状況を報告した。関わっていただいた研究補助員並びにアルバイト諸氏に御礼を申し上げる次第である。

委託研究

西藏文献研究

—大谷大学所蔵の北京版大蔵經 および蔵外文献の研究—

研究員・チーフ 小川 一乗
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館が所蔵するチベット語文献を整理・研究すると共に、貴重な文献を内外に紹介する

ことを目的にしたものである。昨年度は、丹殊爾勘同目録の続刊の原稿の作成、パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムの開発の二つを進めた。

丹殊爾勘同目録（既刊7冊）は、II-1の般若部が刊行された後、その続編の原稿がようやくほぼ完成した。原稿を手直した後、校正作業を経て近いうちに刊行できる運びである。今冊（II-2）は諸経疏部・唯識部・阿毘達磨部を合わせたものである。次冊によって律疏部・本生部・書翰部・因明部・声明部・医方明部・雑部が収められ、全9冊で完結する予定である。

パーソナルコンピュータ・マッキントッシュ用のチベット語システムの開発は順調に進んでいる。チベット語は30個の基本文字に加えて、母音記号、サンスクリットの音写のための幾つかの文字、縦にいくつかの子音が結合された相当数の結合文字によって表記される。結合文字は正書法で許されるもののほかに、サンスクリットの音写のためのものやマントラなどに使われる特殊なものがある。現在のパーソナルコンピュータではフォントとしての文字数が限定されているため、効率的なシステムを作るためには実際の結合文字の使用頻度を調べる必要がある。そこで、“Mahavyutpatti（翻訳名義大集）”の結合文字、特にサンスクリットの音写部分、を全て調査した。これに、嘱託研究員の今枝由郎氏（国立科学研究センター主任研究員）や当該チベット語システムのフォントの作製に携わっている福田洋一氏（東洋文庫研究員）の調査資料も加えて、チベット語の結合文字の実際例をまとめた。この実際例に基づいて、当該チベット語システムによって表示可能な結合文字（縦3段の全てと縦4段の一部）を決定した。そしてそれに基づいてシステムとフォントの作製が進められたのである。チベット語システムがある程度完成し、使用できる段階になって、そのシステムのテストも兼ねて西藏文献目録と金写版西藏大蔵経目録の入力を始めた。これらの入力には研究補助員や大学院生のアルバイトによってなされた。このような内部的なテストを終えた後、1994年度の夏までに、幾人かのチベット研究者にテストをお願いするために当該システムの評価版を作製して配付する予定である。使用可能なものとして公開するためには多くの人に試用してもらい、できるかぎり不具合をなくしておかなければならない。

委託研究

『大正新脩大蔵経』宝積部関係 典籍における学術用語の研究

研究員・チーフ 鍵主 良敬
(仏教学)

本研究は、昨年度（1992年度）から三年計画で始められたものである。その主な目的は、既刊の『大正新脩大蔵経索引第六卷宝積部』の内容を吟味して、改訂すべきところは改訂して、改訂新版を出版することである。『大正新脩大蔵経』全100巻は、漢訳の経・律・論を収録する大蔵経としては最も整備されたものとして全世界のあらゆる研究者に利用されている。そして極めて豊かな内容をもつ大蔵経が、多くの人々の様々な利用の便宜となるように、重要な学術用語を選びそれを解説し、その結果を索引の体裁でまとめたものが、『大正新脩大蔵経索引』全45巻である。それは、昭和三十年代の後半から約三十余年の歳月をかけて完成されたが、現在の学的水準から顧みると、多少改訂すべき事柄も出てきている。そうした要求に答えようとするのが、本研究の直接の課題である。その具体的な目的と方法については、昨年度の研究所報（No.30）に報告したので、それを参照していただきたい。

研究開始から二年目に当たる本年度は、前年度に確認した方法にしたがって研究を続けた。つまり、研究員の各研究分担範囲をそれぞれの責任において検討すると同時に、その検討を均質にするために全体の研究会を実施するという方法である。それに当たって、共通の研究課題を、『勝鬘経』としたので、その解説を通して現行の『大正新脩大蔵経索引第六卷宝積部』に記される『勝鬘経』に関する記述の問題点を確認していった。同時に『索引第六卷宝積部』の記載内容そのものに関する問題点の確認も行っていた。それらの作業の結果、現行の索引には、改めたほうが良いと思われる点が幾つか確認された。それらの具体的な内容については、かなり詳細にわたるので、その一々をここで紹介することは差し控えたいが、

具体的には、比較的訂正の容易なもの、例えば誤字・脱字といったものと、そうでないもの、例えば編集方針の違いに基づくものや經典の理解の違いによるものなどがある。この様な共通の作業を通して確認した諸点を各自の研究分担範囲にどの様に還元し、その結果をどの様に改訂版に表現していくかが今後の検討課題である。

また、以上のような現行の索引の改訂に関する研究と平行しながら、それとは別の新しい研究課題にも、今年度から取りくんでいる。その新しい研究課題というのは、仏教系六大学で組織する大蔵経学術用語研究会（本学では当研究班がその役割を分担している）の中で企画立案されたものであるが、次のようないきさつを経たものであるので一応報告しておきたい。

もともと、『大正新脩大蔵経索引』は、人類の宗教・文化の宝庫としての『大正新脩大蔵経』を専門の研究者以外にも広く開放することを願いとして始められた学術研究の成果であった。その様な意図を反映して、本索引の著しい特徴として次のような点を挙げることができる。一つは、仏教經典などの索引であるから仏教用語に詳しいのはいうまでもないが、それのみでなく、自然・人文・社会などの幅広い視野の中から用語が選択されていることである。今一つは、一冊平均十数万語にも及ぶ採録語の絶対的な数の多さである。従って『大正新脩大蔵経索引』は、一般の仏教辞典ではとうてい採用し得ない豊富な用語を持ち、利用の仕方によっては無限とも言うべき内容を持っているとすることができる。そして、その計画が一応完成したことを受けて、現在ではその見直しを古いものから順に行っているわけである。この作業は学問的に重要なことなので引き続き継続すべきであるが、それとは別に、出来上がった索引をもっと有効に利用する手立てを考えるべきではないか、特に学生の活字離れが喧伝される現今、一般の利用者や初歩の学生にとって大蔵経がもっと身近なものとなるようにするためにはどのような努力をすべきであるのか、といった事柄が熱心に議論されたのである。この様な議論を背景として、『大正新脩大蔵経』が収録する典籍の中から特に重要なもの、仏教を学ぼうとする人々にとって欠くことの出来ない典籍などについての初学者向けの解題を編集するという企画が浮かび上がってきたのである。

そこでどの様なものとすべきか、その基本的な編集方針についての慎重な議論が重ねられた結果、ほぼガイドラインがまとまり、六大学で執筆を分担することが確認

されたのである。本学の分担は、今まで索引編集に携わってきた、「宝積部」「経集部下」「毘曇部下」「経疏部二」「論疏部二」「史伝部上」「統論疏部一」「統諸宗部二」「統諸宗部六」の九部の索引に収録された典籍の中の67点と決まり、その解題の執筆を分担することが最終的に確認されたのである。その確認を受けて、当研究班としてどの様に作業を進めていくかを検討した結果、現在の研究員・研究補助員のみで事に当たるのではなく、これまでに索引編集に携わってきた教員にも課題を分担していただくべきであるということを確認し、それぞれに依頼する分担課題を決めた。それらを受けて、6月6日に執筆分担者の連絡会を開き、この企画・研究の意味と願い等を確認した上で、執筆を正式に依頼した。その後、執筆を分担していただいた方々の並々な努力により、ほぼ原稿が出来上がったので、本学の研究成果として大蔵経学術用語研究会に提出できるよう細部を調整中である。この研究の成果は近いうちに『大正新脩大蔵経収録基本典籍解説』（仮題）として出版される予定である。

1995(平成7)年度「一般研究」選考結果発表

(A)共同研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
大河内了義	研究課題 「日本思想の歴史的総合的研究」 研究員 大河内了義 (教授/ドイツ文学) 池上哲司 (教授/倫理学) 友田孝興 (教授/ドイツ文学) 延塚知道 (助教授/真宗学) 宮下晴輝 (助教授/インド学) 門脇健 (専任講師/宗教哲学)	200万円
河内 昭円	研究課題 「唐代釈教文の研究」 研究員 河内 昭円 (教授/中国文学) 竺沙雅章 (教授/東洋史学) 若槻俊秀 (教授/中国哲学史) 大内文雄 (助教授/中国史) 織田顕祐 (専任講師/仏教学) 山野俊郎 (専任講師/仏教学) 李 青 (専任講師/中国語) 佐藤義寛 (専任講師/中国文学) 西尾賢隆 (花園大学教授) 武田秀夫 (追手門学院大学教授) 今場正美 (本学非常勤講師) 研究補助員 西山進 (前特別研修員) 島津京淳 (大学院博士課程)	200万円
佐賀枝夏文	研究課題 「仏教保育研究—その現状・理念・教育体系について—」 研究員 佐賀枝夏文 (助教授/社会福祉学) 岩田宗一 (教授/音楽学) 嘱託研究員 間野文雄 (住道幼稚園長) 藤兼晃 (大野幼稚園長) 脇淵徹映 (多良第一保育園長) 河村光子 (村松保育園長) 大城邦義 (助手/短期幼児教育科)	200万円
神戸 和磨	研究課題 「近代における仏教研究の方法論 —近代の仏教研究における清沢満之の地位と基礎資料の検討—」 研究員 神戸 和磨 (教授/真宗学) 加来雄之 (専任講師/真宗学) 一楽真 (専任講師/真宗学) 嘱託研究員 木越 康 (助手/短期仏教科)	200万円

(B)個人研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
安藤 文雄	研究課題 「『選本願念仏集』の研究」 研究員 安藤 文雄 (専任講師/真宗学) 研究補助員 三木 彰円 (前特別研修員) 大神 栄治 (大学院博士課程)	100万円
泉 恵機	研究課題 「高木顕明の研究」 研究員 泉 恵機 (専任講師/同和教育)	100万円
宮崎 健司	研究課題 「正倉院文書より見た古代仏教に関する研究」 研究員 宮崎 健司 (専任講師/日本史学) 嘱託研究員 堅田 理 (花園大学非常勤講師) 櫻井 信也 (蒲生町史編纂室) 研究補助員 重本 めみ (大学院修士課程修了)	100万円

1995(平成7)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

日本思想の歴史的・ 総合的研究

研究代表者 大河内 了義
(ドイツ文学)

Überwegの『哲学史』五巻と言えば、ドイツ語圏で、またその影響のもとに哲学を志すものにとって、長い間必携の書とされてきたが、その著作権の所有者であるスイス・バーゼルの出版社 Schwabe は現在これの全面的な改訂・増補を実施しており、すでに十数巻が刊行されている。

その Schwabe 社から最近、新版刊行に際してはヨーロッパの枠をこえて、インド・中国・日本の哲学史をそれぞれ一巻づつ収めたいという希望が表明され、日本の部分に関する協力の要請があった(因みに、旧版では「アジアの哲学」としてわずか二頁の記述があるのみ)。この仕事が実現すれば、ドイツ語文化圏で哲学や思想の研究に携わる人々に対して日本思想への橋渡しができることになり、その意義は極めて大きい。

これにはしかし多くの困難が伴う。一口に日本の哲学ないし思想と言っても、古来からの神道あり、儒教あり、なによりも仏教があり、加えてそうした諸思想の上に、ヨーロッパ思想に触発・形成された明治以降の新しい哲学的営為がある。したがって日本の思想全体を歴史的に跡づけ、学問的に整理し、二次文献表を作り、それらをドイツ語で表現することは個人では不可能に近い。

しかしながら逆に、大谷大学こそこの仕事を共同研究を通して成就させるのに最も相応しい場であり、またその責務もあろう。

このような研究計画にもとづいて、組織に共同研究者として名前をつらねたメンバー以外にも多くの参加をおおぎ、毎回十人以上が十数回にわたって集まり、文献に当り、討論を重ねてきた。

その結果明らかになったことは、日本の思想全体を一貫した「思想史」として記述した労作はほとんど見当ら

ず、個別研究か、個別思想をクロノロジカルに羅列したものであって、何よりも、その方法論が確立していないのではないか、ということであった。したがって、われわれの焦眉の課題は「方法論の確立」ということになった。

そこで次には、各研究者がそれぞれ自分の研究専門分野における「思想史の問題点」を提示し、それに基づいて討論を重ね、文献を渉猟して、問題の所在を明らかにする必要があるという結論に達した。

その手始めとして、1995年2月13日に本学教授大桑齊氏より「仏教的世界としての近世—思想史からのアプローチ」というテーマで、また同3月13日には同じく本学教授箕浦恵了氏より「古代ギリシャにおける〈哲学〉という名前とその概念」というテーマで報告を受け、討論を深めた。

今後はさらに学内外の人々から一層の協力をあおぎ、これと平行して Schwabe 社との連絡を緊密にしながらか、共同研究を続行する予定である。

共同研究

唐代釈教文の研究

研究代表者 河内 昭円
(中国文学)

ここに釈教文というのは、仏教関係の文という意味である。清朝に編纂された『全唐文』一千巻の中には膨大な量の仏教に係する文、すなわち唐代の釈教文が収載されている。それらは、大約、詔勅・奏上文などの官制類、送序・寺記などの序記類、僧碑・寺碑などの碑銘類に分類されるが、いずれも唐代の文学史・仏教史・社会史上の諸問題を解明するための最も重要な基礎資料である。しかし残念ながらこれらの諸文を総合的に注解した書物はこれまでになく、研究者それぞれが当面する問題の処理にあたって、これらの諸文の読解に苦慮しているのが実状である。本研究はその実状に鑑みて、これらの

釈教文を精密に注解し、将来に刊行公開することを目的とするものである。

唐代釈教文のすべてを個人が注解しようとするれば、作業に専念して十年は要する仕事量である。しかも個人の専門的学識が自ずから限定されるために、十年を費やしてなお不完全な結果しか得られないと思われる。すなわち本研究には、中国の文学・語学・史学・仏教学等あらゆる専門分野の知識の集合が必要である。幸い平成六年度において当研究助成を受け、上記専門分野の知識の集合を得て成果を着実にあげることができた。

毎週木曜日午後二時三十分以降の時間を使って行なわれた研究会を通して、前年度は唐代中期の古文家李華の釈教碑文すべて十一首を読了した。阪神大震災の影響を受けて一月以降の予定に変更を余儀なくされ、目標の一部を達成できなかったが、李華を読み終えたことは収穫であった。

李華が生きた時代は宗派の形成という観点から見れば、まだ混沌とした情勢にあった。天台・律・禅・華嚴・浄土等の各派は複雑に錯綜し、実際には今日的に整理されたすがたと相当に異なった状況を呈している。李華の碑文はその異なった認識を如実に示しており、多くの興味深い課題を提供するのである。今年度は、前年度に残した独孤及・梁肅の碑文から注解作業を開始する。李華と時代を接するこれら古文家の釈教碑文は、混沌の時代背景を一層多面的にわれわれに見せてくれるであろう。

なお、本研究班は、参加者のすべてが研究会で討議されたことがらを自由に利用してよいこととしている。比較的早い時期にその成果の現われることが期待される。

共同研究

仏教保育研究

—その現状・理念・教育体系について—

研究代表者 佐賀枝 夏文
(社会福祉学)

一 「真宗保育研究会」を発足

本学幼児教育科の果たすべき役割と使命は、よき仏教保育者の養成を中心に、これらに関する資料収集や研究の蓄積、そして関連機関への情報の提供である。本研究の目的とするところも、幼児教育科に寄せられる役割期待にこたえる教育研究の一環である。

昨年度はじまった本研究は、初年度の研究段階として「仏教保育者のアイデンティティの確立」を研究の目的として、文献資料の収集を重点的におこなった。分野としては仏教、教育、保育を中心とし、隣接の領域としてキリスト教、キリスト教保育、心理学など、入手した文献資料をもとに研究に着手したところである。また、研究をチームとしてすすめていく必要性から、本研究班を母体として「真宗保育研究会」をつくり、連絡調整、研究会などを組織的におこなった。昨年度は連絡調整、研究発表会などのほかにも、それぞれに成果をあげることができた。なかでも当会が主催した大谷保育協会との交流懇談会、九州地区園長会との交流会を主催できたことは着実な一歩と評価できるだろう。将来的に本研究が成果をあげ、対外的な広がりをもち、調査研究や研究成果をまとめるための機関としても発展させたいと考えている。これらのことを踏まえて、さらに本年度は大谷保育協会、仏教系保育組織と連携を深め、研究の実をあげたいと考えている。

二 研究資産の蓄積

仏教保育の根本を伝えることは、不可説であるにしても、仏教保育者の養成をおこなうためには、関連する研究を蓄積し教育体系として伝える必要がある。本年度の計画としては、他機関とのネットワークの充実をはかり、有機的に連携し、研究をすすめていきたい。その具体的な計画のひとつとしては、「仏教保育の実践プログラム」の収集、分類整理をおこないたい。大谷保育協会の各実践園でおこなわれている「仏教保育の実践プログラム」が実用性をもったものとして、宗教行事、特別プログラム、季節のプログラムとして分類整理されれば、仏教保育の実践の中核をなす教育資源となるであろう。また、集積分類された、これらの資産の活用方法などを考えていきたい。なお、昨年度の研究の成果として、本年度には仏教保育総合の授業のためのテキスト『仏教保育概説(仮)』宣協社を、本研究の成果としてその一部

が披露できる予定である。

共同研究

近代における仏教研究の方法論 —近代の仏教研究における清沢満之の 地位と基礎資料の検討—

研究代表者 神戸 和磨
(真宗学)

本学の学祖である清沢満之(1863—1903)は、近代における仏教研究に大きな視座と方向性を与えた。

日本の近代は西洋の文化と東洋の文化の本格的な遭遇を意味する。そのことは、それまでの日本における漢文を中心としてきた伝統的な東洋の学問研究の転回点を意味した。仏教研究もまた、それまでの宗学的封建的な方法からの大きな転換を迫られたのである。しかし仏教研究の近代化ということは、決して西洋の学的方法論の受容による近代化だけを意味するのではなく、東洋の精神世界を代表する仏教の学的方法論が世界的視野の中で問い直されたという意義をもっていたのである。清沢は、西洋と東洋の出会いのただ中、世界的視野をもって、仏教、就中、浄土教の学的方法論の確立を担った。本研究では、近代における仏教研究(とくに浄土教)の課題性と方向性を検証することによって、今日の東洋独自の研究方法を模索するものである。

これまで、清沢の思想もしくは、信仰運動が、近代において果たした役割について、歴史的・社会的検討はある程度の成果が学界に提出されている。しかし清沢の仏教研究の方針と思想が、近代という仏教研究・哲学研究の思想状況の中でどのような位置づけをもったか十分に明らかにされたとはいえない。清沢は初期の帝国大学で哲学を学び、後年には真宗大学の建設という表現をとって、新しい仏教研究と教育のあり方を模索した数少ない思想家であり、近代における仏教研究の方向性を窺うためには不可欠の存在である。今日、仏教学の方法論が根底から問い直されている中で、その出発点において清沢の果たした役割が明確に押さえ直されなければならない

い。その役割を把握するためには、たとえば清沢の周辺で活躍していた思想家である加藤弘之、井上哲次郎などの思想的傾向や大学を建設した福沢諭吉、新島襄などの教育観との比較、当時の仏教研究の動勢などの調査が行われなければならない。

昨年度までの共同研究においては、清沢自身における時間軸としての思想的背景が検討されてきた。その成果をふまえて、本年度からは、あわせて空間軸としての時代・社会の中での思想的意義を新たな共同研究の課題として研究をすすめた。

具体的には、昨年度までに清沢関連論文のキーワードを付したデータベース化と、清沢に関する基礎資料が収集されており、清沢の著作・論文の中で過去に出版されたものについては校訂と解題が終わっている。本年度は、それらの基礎資料について検討会を行い、電子出版の準備として一々の資料についてキーワード・解題を付していく。

また、清沢満之の研究の基本資料であった『清沢満之全集』八巻が現在絶版になっており、多方面の研究に耐える基礎資料を作成することは本学の使命であると考えられる。本共同研究は、そのための準備という位置を有している。また本学の学生が用いる清沢についての基本的テキストがないことは憂慮すべき状況である。具体的な目標としては、この研究期間内に本学の学生のための基本テキストを作成する予定である。

個人研究

『選択本願念仏集』の研究

研究代表者 安藤 文雄
(真宗学)

本研究の目的は『選択本願念仏集』の思想的読み込みによって、法然の仏教観を浮き彫りにすることにある。『選択本願念仏集』が法然の主著であり、日本仏教の転換点となる重要な典籍であることは、誰もが認めるとこ

ろであるが、そのことが本書自体の内容に即して、仏教の展開における課題に応答する質をもった仏教観の提示であることは、必ずしも明らかであるとは言えない。現代、法然の思想については、文献面を中心としての原典確定、『選択本願念仏集』以外の文献研究が盛んである。このことは法然の真筆がほとんど現存しないことから、当然為されなければならないことではあるが、法然の思想の原点は『選択本願念仏集』にあり、その思想的な読み込みが重要であると思われる。本研究では、現代までの法然研究・日本仏教研究の成果を踏まえつつ、『選択本願念仏集』に即して法然の仏教観を明らかにしたい。また、『興福寺奏状』、『摧邪論』、『立正安国論』等、法然と『選択本願念仏集』への批判を視野に入れて、『選択本願念仏集』の持つ位置付けを明確にすることが本研究の目的である。

研究計画としては、まず『選択本願念仏集』のテキストについての諸本校訂を行なう。『選択本願念仏集』の研究史を概観するために、法然の門弟から現代までの本書にかんする諸注釈書を収集する。また、『選択本願念仏集』を中心とした法然関係雑誌論文を収集する。雑誌論文については、日本仏教史関係の論文も併せて収集したい。収集した資料については、データベース化し、目録にする予定である。以上の基礎作業を踏まえて、『選択本願念仏集』の文に即して、思想的に課題となる箇所をピックアップして、検討していきたい。

研究補助員 三木彰円（前特別研修員） 大神栄治（大学院博士課程二回生）

個人研究

高木顕明の研究

研究代表者 泉 恵機
(同和教育)

高木顕明（1864～1914）は、1911年1月、幸徳秋水らとともに「大逆事件」に連座し死刑の判決を受けた、和

歌山県新宮市の真宗大谷派浄泉寺の住職であるが、彼はその後、無期懲役に減刑され、秋田刑務所に収監され、1914年6月、獄中で自死した。

彼は、全くの無実の罪で連座したのであったが、死刑判決と同日付けて大谷派から「攘斥」の処分を受け、それ以後大谷派の宗門の中では、その実績もかえりみられることなく、いわば見捨てられてきたと言ってよい。

今日までの高木顕明に関する主な研究としては、以下のものが数えられる。

- ・吉田久一「幸徳事件と仏教」（『日本近代仏教史の研究』所収、1959年）
- ・大熊正道「アナキズムと思想の土着——大逆事件に連座した三人の僧侶——」（中村雄二郎編『思想史の方法と課題』所収、1973年）
- ・高木道明「大逆事件と部落問題——高木顕明の人と思想——」（『部落問題研究』第28輯所収、1970年）

吉田氏の研究は、明治仏教界の中で大逆事件に連座した内山愚童、峯尾節堂と高木顕明の位置を明らかにしようとしたものであり、高木顕明研究としては最初のものである。大熊氏の論文は、高木たち、連座した三人の僧侶の思想を、日本におけるアナキズム思想土着のそれぞれのパターンとして取り上げたものである。また、高木道明氏の論文は、本学の卒業論文に加筆されたものであるというが、高木顕明のみに焦点を当て、その生涯と思想を叙した労作である。しかも、部落差別の問題との関連において取り上げた論文として注目すべきものである。

しかし、高木顕明研究については端緒についたばかりであり、いまだ基礎資料も十分には明らかにされていないというのが現状である。

それ故、本研究においては、まず彼の生涯の歷程について、その詳細に至るまで、出来る限り明らかにすることを目的としている。そのために、新たな資料の発掘にも心しつつ、未発表の基礎資料に当たるとともに、裁判資料や、明治学院大学蔵の沖野岩三郎に関する文書を調べることによって、彼の生涯の不明部分を補っていく予定である。

また部落差別の問題との関連に殊に注意を払い、新宮の浄泉寺や、浄泉寺がご門徒として多く抱える市内の被差別部落への聞き取り等も行っていくと考えている。

個人研究

正倉院文書より見た古代仏教に関する研究

研究代表者 宮崎 健司
(日本史学)

本研究は、奈良時代を対象として、写経及び蔵経目録などの分析を通して、古代仏教の政治史的・仏教史的意義を検討するものであり、特に当該期の仏教界の動向と王権・国家との関わりを解明することを目的とする。

上述の課題を達成するには多方面からの研究が必要と思われるが、本研究ではその素材を奈良時代の第一次史料である正倉院文書を中心に検討したい。正倉院文書は、東大寺造営の令外官である造東大寺司の写経所に伝存した帳簿群である。その内容は写経所を中心とした造東大寺司の機構そのものや、そこで行われた造寺・造仏事業及び写経事業の様子を伝える貴重なものといえる。とりわけ後者の諸事業は、皇室によって主導され、その意向が強く反映していると思われるが、それは当該期の仏教界の動向を決定的にリードするものであったと考えられる。つまり、そこに見える仏教界と皇室仏教の関係は、王権・国家と仏教の関係を考える上で重要な問題を提起するものといえる。

本研究の方法としては、第一には、写経事業において、一切経ではなく問写経の分析こそが仏教界の動向を解明するにもっとも有用な手段と思われるので、主要な個別問写経の分析を試みたい。しかも既存の研究が写経のスピードや経典の量などの物理的側面を分析基準としたのに対し、参画した僧尼や官人及び経典の内容の検討によって、より有機的な分析を行ないたい。第二には、すでにいくつかの写経を検討する中で注意したが、今までほとんど検討されてこなかった勸経史料や蔵経目録の分析を試みたい。これは仏教界における一切経の理解や現状、さらに経典研究などといった教学の問題を正倉院文書の中から抽出しようとするものである。このような教学的な動向の跡付けと王権・国家の思想状況やその施

策との対比は極めて重要な視点であると思われる。第三には、仏教教義に支えられた仏教美術の諸相を垣間見ることができる造寺・造仏史料と現存する仏教美術とを比較検討することで、当該期の仏教美術の実相をより鮮明に解明したい。これは古代仏教に対する理解をより豊かなものにする知見を与えるであろう。第四には、上述の正倉院文書を素材とする分析とは別に、諸資料による当該期の重要な僧尼の僧伝研究や寺院組織の研究、さらに仏教学の研究成果を歴史学研究の上に位置づけるといった作業も試みたい。以上の四点の課題に取り組み、その研究成果を有機的に連関させることで、上記目的に則した十分な成果が得られるものと考ええる。

なお、素材となる正倉院文書の史料的性格から、分析の前提となる基礎的作業が多くの部分を占めることになるであろう。

1993アメリカ宗教学会 (AAR) に参加して

ロバート・F・ローズ

1993年11月20日から23日まで、米国のワシントン D. C. において、アメリカ宗教学会 (American Academy of Religion; 以下 AAR と略称する) が開催された。これは北米最大の宗教学関係の学会であるが、毎年200以上のパネルが設けられ、数千人の研究者が参加するので、アメリカ・カナダの宗教研究の動向を知るためには重要な学会である。さらに数多くあるアメリカの学会の中でも、仏教関係の発表がもっとも多いのがこの学会である。これらの理由により、国際仏教研究班では、1991年より毎年何人かの研究員を AAR に派遣して、資料収集や北米の研究者との交流に務めてきた。1991年のカンザス・シティでの AAR には宮下晴輝・加来雄之両研究員が参加し、また1992年の大会には武田武麿研究員 (当時真宗総合研究所所長) と私が参加した。これらの学会についての詳しい参加報告は、『研究所所報』第28号と第30号に掲載されているので、それらを参照していただければ幸いである。

さて、1993年の AAR は、91の分野にわたる227のパネルが設けられていた。その中でも、仏教研究の分野は AAR の中でも最も活発な分野の一つであり、今年も7のパネル (そのうち一つは中国宗教研究グループと協賛で開かれ、またもう一つは日本宗教研究グループと共同で行なわれた) を設けていた。さらに、これらのパネルとは別に、日本宗教研究グループも単独で日本天台の本覚思想のパネルを設定していた。それらのパネルのテーマ、チェアパーソン、そして代表者名と発表題目を挙げれば次の通りである。

Buddhism Section

The Rebirth Doctrine and Buddhist Practice in Asia

Chairperson: John Makransky (Boston College)

Charles Hallisey (Harvard University): "Rebirth and the Sense of Community in Thai Buddhism."

Stephen F. Teiser (Princeton University): "New Bodies for the Ancestors: Rebirth and the Practice of Medieval Chinese Buddhism."

Taitetsu Unno (Smith College): "Rebirth in Japanese

Pure Land Buddhism."

William R. LaFleur (University of Pennsylvania): "Rebirth and Justice: Medieval Japanese Views and their Continuing Social Impact."

Discussant: Thomas P. Kasulis (Ohio State University)

Topics in Buddhist Studies

Chairperson: Janet Gyatso (Amherst College)

Christopher Queen (Harvard University): "Social Engagement in Buddhist Ethics: Heritage or Heresy?"

Paul Kocot Nietupski (John Carroll University): "Changing Patterns of Authority in Buddhism."

Stanley K. Abe (Dartmouth College): "Buddhist Inscriptions and Images: Yiyi as Patrons of the Longmen Guyang Cave."

Richard Kohn (University of California, Berkeley): "Padmasambhava and the Hermeneutic of Conversion."

Charles S. Prebish (University of Calgary): "The Academic Study of Buddhism in America: A Current Analysis."

New Voices in Buddhist Studies

Chairperson: Jacqueline I. Stone (Princeton University)

David Need (University of Virginia): "In the Absence of the Buddha: The Authority of the Teacher in the Indo-Tibetan Buddhist Traditions."

Mathieu Boisvert (Université du Québec à Montréal): "Maranasati: Textual Interpretation and Modern Practice."

Richard S. Cohen (University of Michigan): "Domestic Help: The Monastic Cult of Hariti in Context."

Daniel Boucher (University of Pennsylvania): "Translation as a Cross Cultural Event: A Look at the Third Century Translator Dharmaraksa."

A Discussion of Malcolm David Eckel's *To See the*

Buddha: A Philosopher's Quest for the Meaning of Emptiness

Chairperson: Collett Cox (University of Washington)

Panelists: John Markransky (Boston College)

Charles Hallisey (Harvard University)

Miriam Levering (University of Tennessee, Knoxville)

Robert F. Campany (Indiana University, Bloomington)

Respondent: Malcolm David Eckel (Boston University)

Teaching Zen in the Classroom: Major Approaches

Chairperson: Miriam Levering (University of Tennessee, Knoxville)

Panelists: Dennis Lishka (University of Wisconsin, Oshkosh)

Griffith Foulk (University of Michigan)

Carl Bielefeldt (Stanford University)

Robert E. Buswell, Jr. (University of California, Los Angeles)

John Maraldo (University of north Florida)

Victor Hori (University of Toronto)

Buddhism Section/ Chinese Religions GroupLiving Words: Scriptural Transformation and Meaning in Tiantai

Chairperson: Stanely Weinstein (Yale University)

Paul Swanson (Nanzan Institute for Religion and Culture): "Say What?! Chih-i's Use (and Abuse) of Scripture."

Linda Penkower (University of Pittsburg): "Making and Remaking Tradition: Chan-jan and the T'ang T'ien-t'ai Agenda."

Daniel Getz (Bradley University): "The Tiantai Vision: Reclamation and Reorientation in Siming Zhili (960-1028)."

Daniel B. Stevenson (University of Kansas): "Ritual Text, Tradition and Performance in Sung T'ien-t'ai."

Buddhism Section/ Japanese Religions Group"Critical Buddhism" (*Hihan Bukkyō*): Issues and Responses to a New Methodological MovementChairperson: Sallie King (James Madison University)
Steven Heine (Pennsylvania State University): "Critical Buddhism and the Debate Concerning the 75-Fascicle and the 12-Fascicle *Shōbōgenzō* Texts."

Dan Lusthaus (Bates College): "Critical Buddhism: Returning to the Sources."

Nobuyoshi Yamabe (Yale University): "The Critique of *Dhatu-vada* in Critical Buddhism."

Jamie Hubbard (Smith College): "A Critical Appraisal: Critical Buddhism."

Respondent: Paul Swanson (Nanzan Institute for Religion and Culture)

Japanese Religions GroupInnate Enlightenment (*Hongaku*) in Japanese History: A Re-examination

Chairperson: Ruben L. F. Habito (Southern Methodist University)

Paul Groner (University of Virginia): "Taking Teachings on Innate Enlightenment Seriously: Reading the *Kankō Ruiju*."

Fumihiko Sueki (University of Tokyo): "Two Contradictory Aspects in the Teaching of Innate Enlightenment in Medieval Japan."

Jacqueline I. Stone (Princeton University): "Philosophical Climaxes and Moral Quagmires: Reconsidering Assumptions in the Study of Tendai *Hongaku* Thought."

Respondents: Kenji Matsuo (Yamagata University)

Masatoshi Nagatomi (Harvard University)

このように仏教関係の発表が多く行なわれたのであるが、このリストから伺えるように、AARでは仏教についての様々な方面からの研究発表が行なわれた。例えば "The Rebirth Doctrine and Buddhist Practice in Asia" (『アジアにおける輪廻転生の教義と仏教の実践』) では輪廻転生の思想とその社会的受容について考察し、"A Discussion of Malcolm David Eckel's *To See the Buddha: A Philosopher's Quest for the Meaning of Emptiness*" ではマルコム・デビッド・エッケル教授の最新の著作である *To See the Buddha: A Philosopher's Quest for the Meaning of Emptiness* (『仏を見ること—ある哲学者の空の探究』) についてのパネル・ディスカッションが行なわれ、"Teaching Zen in the Classroom: Major Approaches" (『禅をいかに教室で教えるべきか—その主な方法』) では禅を大学の宗教学の授業でいかに教えるべ

るべきか、という問題についてのパネル・ディスカッション形式で討論が行なわれた。さらに仏教セクションと日本宗教研究グループが共同で開催した“Critical Buddhism: Issues and Responses to a New Methodological Movement”（「批判仏教—新しい方法論的運動の課題と応答」）では、近年駒澤大学の袴谷憲明教授や松本史郎教授などによって提唱されている「批判仏教」を取り上げたものであったが、このパネルは松本教授を日本から迎えて盛大に行なわれた。

しかし先に挙げたパネルの中で私が最も関心をおぼえたのは、中国天台と日本天台のパネルであった。中国天台のパネルは仏教セクションと中国宗教グループが協賛して開いたもので、“Living Words: Scriptural Transformation and Meaning in Tiantai”（「生きている言葉—天台における経典の変容と意味」）というものであり、また日本天台のパネルは日本宗教研究グループが主催したもので、“Innate Enlightenment in Japanese History: A Re-examination”（「日本における本覚思想の再検討」）と題されていた。私自身天台仏教を中心に従来研究を行ってきたのであるが、アメリカの学会で天台関係のパネルが二つも同時に開催されたと言うことはかつてないことである。これは北米の天台研究が近年飛躍的に発展していることを示していると思われる。しかしこの二つのパネルについては、すでに『仏教学セミナー』58号で報告してあるので、詳しいことはそれを見ていただきたい。

AARに参加したのはこれが三回目であったが、この学会にでるたびに感じることはその規模の大きさである。先に述べたように、毎年AARでは200以上のパネルが行なわれ、あらゆる方面からの宗教についての研究が発表され、それに出席することによって宗教学の最先端の動きを知ることができる。さらにこの学会にはアメリカで活躍している仏教学者が多く出席しているので、これらの人々に会い、現在の仏教研究の課題などについて意見交換を行なう絶好の機会である。またこの学会の一部として開かれる宗教学関係の書籍の見本市には120ほどの出版社が店を並べ、最近出版された書籍を展示即売しており、資料収集に最適の場を提供してくれている。今回参加して、多くの研究発表を聴き、また多くの仏教研究者と話すことを通じて、北米の仏教学の現状についてかなりの情報を収集することができたので、それを国際仏教研究班の今後の活動に生かして行きたいと思う。

1994年度前期 大谷大学開放セミナー

1994年度前期開講の「大谷大学開放セミナー」は、5月18日から7月13日にわたり、多目的ホールを会場にして開催された。今回は、真宗学の安富信哉教授による「人間成就の教え—『大無量寿経』にきく」と、東洋史学の竺沙雅章教授による「敦煌文献の世界—写経にみる仏教信仰—」の二つの講座が開かれた。二つの講座の概要、各回のテーマと日程は、下記のものであった。

人間成就の教え—『大無量寿経』にきく—

講師 大谷大学教授 安富信哉 (真宗学)
 期間 5月18日(水)～7月13日(水) <5回>
 時間 水曜日 午後6:30～8:30
 会場 大谷大学多目的ホール
 参加費 5,000円

概要

『大無量寿経』は、ふかい祈りの書である。その祈りをこの経は、「本願」という語で表現している。その祈りは、私たちの祖先の胸に響流(こうりゅう)し、心を潤し続けてきた。

この経のなかで、釈尊は弟子の阿難(あなん)にひとつの物語を説かれる。

……永劫の昔、法蔵(ほうぞう)という名のひとりの出家者が、世自在王仏(せじざいおうぶつ)という師の仏に出会い、一切の生きと生ける者をその苦悩から救いたいという悲願のこころを發した。その祈りを、具体的に48の誓願(「本願」)をもって示した。その中で法蔵は、あらゆる苦悩する者が救われる世界として、極楽浄土を建立することを誓い、それを完成させるために菩薩としての修業を積んだ。わけでもその18番目の願(第十八願)のなかで、いかなる者であれ、この本願を信じ、わが名を念ずれば、浄土に生まれ、そこで仏と成ることができると誓った。かくて法蔵菩薩は、自らの修業を円満成就し、「阿弥陀(あみだ) (無量寿・無量光) という名の仏に成られた……と。

このように『大無量寿経』は、一切の生きとし生ける者への仏のふかい祈りを明らかにした経典である。それゆえにこの経は、成立してから2千年たった今に至るまで、大乘仏教の根本精神を表す聖典として、インド、中国、朝鮮、日本の祖師たちに釈義され、のみならず民衆のなかに永く、また広く帰依されてきた。

このセミナーでは、『大無量寿経』を「人間成就の教え」と捉え、この視点より、とくに親鸞の指教(しきょう)に導かれながら、この経のこころを尋ねていく。小テーマとして、つぎのことを予定している。

- (1)「はかりなきいのち」の経：『大無量寿経』は「無量寿」の経である。その経題に託された本経の願いについてかんがえる。
- (2)物語のはじまり：この経は、仏弟子の阿難があるとき釈尊の希有のすがたを拝見し、驚愕し、發問することから説きだされる。この経の発端を概観する。
- (3)法蔵菩薩(ほうぞうぼさつ)とその本願：釈尊が阿難に説かれたのは、永劫の昔、ふかい祈りの心(本願)を發した法蔵菩薩のいわれである。發願の経過をたどる。
- (4)人間への祈り：法蔵菩薩の本願は、ほかならぬ人間一人ひとりにかけられる。いわば人間成就への祈りである。その本願の意味を問うてみる。
- (5)久遠の会座(えざ)：この経に聞くということは、私たちが阿難とともに釈尊の説法の会座に連なるということである。改めて本経に聞く意義を尋ねる。

日	期	内容
第1回	5月18日(水)	「はかりなきいのち」の経
第2回	6月1日(水)	物語のはじまり
第3回	6月15日(水)	法蔵菩薩(ほうぞうぼさつ)とその本願
第4回	6月29日(水)	人間への祈り
第5回	7月13日(水)	久遠の会座(えざ)

テキスト 『真宗聖典』(東本願寺出版部刊)
 参考書 『大無量寿経に聞く』(教育新潮社・松原祐善著)
 『浄土三部経(上)』(岩波文庫・中村元著)

敦煌文献の世界—写経にみる仏教信仰—

講師 大谷大学教授 竺沙雅章 (東洋史学)
 期間 5月14日(土)～7月9日(土) <5回>
 時間 土曜日 午後2:00～4:00
 会場 大谷大学多目的ホール
 参加費 5,000円

概要

敦煌は中国の西北、いわゆるシルクロードの東の入口に位置して、早くから開けた仏教都市である。その東南20kmに敦煌千仏洞とか莫高窟とよばれる石窟があり、1900年、その一室からおびただしい数の文献が発見され、敦煌が一躍有名になった。早速、文献の研究が始まり、敦煌学という新しい学問分野も生まれた。しかし、世界の各地に分散して所蔵されたために、その全容が分かるようになったのは、近年のことである。

4万点近い漢文文献のうちで最も多いのは、仏典の写本である。それも、『大般若経』『金剛経』『法華経』など、今もよく用いられている経典が大部分を占める。その書写年代は、5世紀から11世紀初である。そのなかには、官宮写経所で専門の写経生が書写した一切経の経巻、病氣平癒や家内安全を祈願したり、亡き父母らの菩提を弔うために書写して仏寺に奉納された願経、僧尼や信者たちが受持し読誦するために編まれた冊子本の日用經典集など、さまざまな写経をふくんでいる。それらの多くには、敦煌の人々の仏教に対するあつい帰依の心が印せられている。

写経のほかにも、祈願文や施入疏、葬送と追善供養のために作られた文書などが、多く見出される。また当時の人々は、親睦と相互扶助とを目的とした「社」を結んで、仏寺での種々の奉仏行事に参加したり、社内不幸があると、力を合わせて葬儀を営むなどの活動を行っていたが、一連の「社」文書からも、彼らの宗教生活の様子を窺うことができる。

本セミナーでは、以上のような敦煌文献中の写経や宗教文書を資料にして、敦煌の歴史と社会、民衆の仏教信仰などを具体的に述べていく。そして最後に、敦煌仏教と中原仏教との関係を、漢訳仏典史の面から探りたい。

日	期	内容
第1回	5月14日(土)	藏経洞のなぞ—敦煌文献の発見と研究
第2回	5月28日(土)	写経でたどる敦煌の歴史
第3回	6月11日(土)	日用經典のかたち—冊子本・絵入本
第4回	6月25日(土)	敦煌の宗教生活—「社」と葬送
第5回	7月9日(土)	漢訳仏典史よりみた敦煌写経

1994年度後期 大谷大学開放セミナー

1994年度後期開講の「大谷大学開放セミナー」は10月1日から11月30日にわたり、多目的ホールを会場にして開催された。今回は、仏教学の木村宣彰教授による「大乘の仏道を求めて—『維摩経』に学ぶ—」と、宗教学の武田武磨教授による「宗教の出会いと受容—比較宗教学への誘い—」の二つの講座が開かれた。二つの講座の概要、各回のテーマと日程は、下記のようにであった。

大乘の仏道を求めて—『維摩経』に学ぶ—

講師 大谷大学教授 木村宣彰 (仏教学)
 期間 10月12日(水)~11月30日(水) <5回>
 時間 水曜日 午後6:30~8:30
 会場 大谷大学多目的ホール
 参加費 5,000円
 概要

『維摩経』は、大乘仏教の精神を現実生活の中にどのようにして生かすかということを中心としている。そこで「維摩」という在俗の信者を登場させドラマチックな構想でもって大乘仏教の世界観・人間観を表明しようとしている。

この経の根底には大乘仏教の根本である「空」の思想が流れている。しかし、この経ではその理論的な解明よりも、むしろ「空」の実践をすすめるところに主眼がある。「空」の平等性にもとづく「不二」の思想を基盤にすえ、大乘の仏道とは何か、真の菩薩行とは何かについて明らかにしようとしている。

『維摩経』は、特定宗派のよりどころとはならなかったが、古来より各宗の祖師が競って研究してきたのは大乘の仏道にたって人間の理想を追求してやまないからである。

わが国では、鳩摩羅什による漢訳の『維摩詰所説経』が愛読され、教理的にも文学的にも大きな影響を与えてきた。そこで鳩摩羅什訳の華麗な経文を味読し、主として次のような順序で、大乘の仏道を探求したい。

1. 『維摩経』とは：『維摩経』という經典のなりたちや、全体の構成などを考え、この経の要旨の把握につとめる。
2. 仏国土の清浄：「心浄土浄」という言葉を手がかりに仏国土とは何か、仏国土と衆生のかかわりについて学ぶ。
3. 維摩と仏弟子：仏弟子に対する維摩の批判の内容から菩薩の理想、出家と在家、あるべき菩薩行などについて学ぶ。
4. 煩惱即菩提：仏道について説く維摩の説法を通して、われわれにとって「仏種」とは何か、煩惱とは何かを考える。
5. 不二の世界：対立矛盾する生死とか、善悪とか、美醜とかを超越した「不二」の世界について考える。

日程

第1回 10月12日(水) 『維摩経』とは
 第2回 10月19日(水) 仏国土の清浄
 第3回 11月2日(水) 維摩と仏弟子
 第4回 11月16日(水) 煩惱即菩提
 第5回 11月30日(水) 不二の世界

宗教の出会いと受容—比較宗教学への誘い—

講師 大谷大学教授 武田武磨 (宗教学)
 期間 10月1日(土)~11月12日(土) <5回>
 時間 土曜日 午後2:00~4:00
 会場 大谷大学多目的ホール
 参加費 5,000円
 概要

私たちの周辺には、宗教という名のもとにいろいろな現象が見られます。それらの現象から宗教を理解しようとすると、宗教は得体の知れないつかみどころのないものになってしまいます。しかも最近では、宗教の問題が社会的な話題になってしまいますし、政治的な問題の内面に宗教の存在が指摘されています。宗教とは何か、この問いにどう答えるか、が今こそ求められていると言えましょう。

比較宗教学の考察は、さまざまな宗教について理解する資料・テキストを提供するものではありません。そういう具体的な宗教理解ではなく、「宗教的なもの」といえるに必要な、或る「枠組み」を考えるのです。宗教といえる共通する特性と、そうはいえない異質性を考えるのです。したがってやはり基本は「宗教とは何か」を問う考察であるのです。

この共通性と異質性の理解は、諸宗教の出会いの「場」に最も顕著に明らかにされるのです。今回のセミナーでは、この宗教の出会いと受容の様相をたどってみたいと思っています。

「場」とはこの場合、思想として表現された宗教とっておきましょう。つまり、宗教家や思想家が自己の信仰に立脚して、諸宗教とどのように対しているか、これらの事実によりながら基本的な「枠組み」を考えてみたいのです。セミナーでは、フランスのアリ・ベルクソンと日本の清澤満之、いずれも今世紀の初頭に活躍した東西の思想家に注目して、それを考えていきます。

宗教によって私たちは、今、何を求めているのでしょうか。比較的宗教学を理解することによって、そのことが少しでも明らかにできればと思います。

日程

第1回 10月1日(土) 比較宗教の意味
 第2回 10月8日(土) 「宗教とは何か」をどのように問うのか
 第3回 10月15日(土) キリスト教的立場・ベルクソンの宗教思想
 第4回 10月29日(土) 仏教的立場・清澤満之の「精神主義」
 第5回 11月12日(土) 「人間とは何か」を真実に問う比較宗教

第一部

日時 1994年11月10日(木) 16:10～

場所 多目的ホール

大谷大学開放セミナー特別公開講座

ニマルン寺院のツェチュ祭とチャム

フランス国立科学研究センター主任研究員 今枝 由郎

ニマルン寺院は、ブータンのほぼ中央、ブムタン地方のチュメー谷（標高2700メートル）に位置している。

仏教王国ブータンの中でも、とりわけブムタンは仏教の里であるといえる。パロと並んで七世紀にブータンに仏教が最初に伝来した土地であり、中世には埋蔵宝典発掘者ベマ・リンパ（1450～1521）のようなブータン・チベット仏教史上でも特筆に値する高僧を生み、山あいのあちこちに幾多の寺院が散在している。現在も人々の信仰は殊に篤く、自他ともに認める聖地である。

ニマルン寺院は、チベット仏教のニンマ派（古派）の法灯を受け継ぐ寺院である。チベット仏教圏の一員であるブータンは、チベット仏教に色々な宗派があるうちのドゥック派を国教としていることから、ドゥック派一色かと思われがちであるが、決してそうではない。ドゥック派が国教となる以前から、ニンマ派が相当流布しており、この両派が現代ブータンの二大宗派といえる。

ニマルン寺院は、東チベットのカム（現在は中国の四川省）地方出身のドリ・トゥルク（1902～1952）師の建立になる。師は、中央チベットの諸寺院で修行したあと、1935年ブータンに至り、この地に仏法を広めるため逗留することにした。そこで、チュメー谷の信者からの寄進で、新たに建立したのがニマルン寺院である。1959年にチベットが中国に併合されるまでは、チベット文化圏が一つのまとまった地域として、いかに広範囲にわたって人の交流、行き来があったかを窺わせる好例である。

ニマルン寺院は、1935年に礎が敷かれ、1937年には建物が完成、その後内部の仏像・壁画の制作に3・4年かかり、落慶法要が営まれたのは1941・42年である。当初の建物は、一階建であったが、1953年から1955年にかけて上の階が増築され、現在の二階建の本堂になった。一千数百年の長い歴史をもち、幾千もの寺院を誇るチベット仏教圏の中では、比較的新しい、というよりはつい最近創建されたばかりの寺院である。その規模にしても、本堂といい増坊といい、こじんまりとした小さなもので、在籍する僧侶も70名程の、まさに田舎のお寺といっ

た感じである。こうした意味ではニマルン寺院は、ブータン仏教を、チベット仏教を代表する一大伽藍では決してない。

ニマルン寺院は、現在でも昔ながらに生きている、機能している小さな村のお寺である。これは、ある意味では何ら取り立てていべき事柄ではない。ところが、チベット仏教の置かれた現状の悲劇性を考えてみると、この一見ありきたりの村寺であるニマルン寺院にこそ、むしろ逆説的に意義が見い出される。

思うに、アジアはその長い歴史を通じて、インド文化圏と中国文化圏とに大きく二分されるであろう。このアジアの二大文化圏の中間にあって、その両者の影響を受けつつ、チベット圏の諸民族は、大乘仏教の理念に基づいた独自の崇高な精神文化を花咲かせた。ところが今世紀に入ってから、この文化圏の諸国・諸民族の多くは、政治的・社会的に悲しい変貌を余儀なくされ、今や風前の灯である。その最たるものが本家本元のチベットで、1959年以来チベットの最高指導者であるダライ・ラマは祖国を逃れ、多くの同胞チベット人とともに亡命生活を送っている。こうした状況の中で、政治的にも独立を守り、社会・文化的にも外部からの影響に押し流されることなく今日に到っている唯一の例外がブータンである。いわばチベット文化圏最後の砦であり、この“一隅”だけにチベット仏教が本来の形で守り伝えられている。この意味において、ブータンの小さな村寺ニマルンは、まさにかけがえのないものである。小さいながらも、1000年余の歴史をもつニンマ派（古派）の伝統を忠実に守る由緒正しい寺であり、その儀式・法要音楽等の格調高いことは、ブータンでも筆頭である。今の管長というか最高位の僧は、元ブータン国立図書館長のロボン・ペマラ師で、ブータン、さらにはチベット仏教圏全体のなかでも屈指の学僧である。

ニマルン寺院の場合もそうであるが、ブータンの一年を通じて数ある祭のなかで、最も盛大なのは、ツェチュ祭である。ツェチュ、すなわち「10日（祭）」は、ニンマ派の開祖グル・リンポチュの祭である。グル・リンポ

チュの生涯は事実と奇蹟・伝説とが密接不可分に入り混って伝えられており、不明な部分が少なくない。しかし師の生涯に起こった重要な出来事はすべて月の10日に起こったとされるので、師の信奉者にとって月の10日＝ツェチュは特別な日である。

グル・リンポチュの信奉者は、各月の10日にグルの生涯に起こった12の重要な出来事のうち、その月に該当する出来事を記念するための法要を行う。これがツェチュ“10日”の本来の意味である。しかもこれは信者にとって、「月の10日に法要を勤める人のいるところには、必ず戻ってくる。」と言い遣して、我々の世界を後にしたグル・リンポチュを月々目のあたりに拝む機会でもあり、二重の意味がある。だからツェチュは、自分の家の仏間で毎月10日に勤めるとごく簡単な勤行から、寺ごとに行うもの、各ゾンカックのゾンで催されるもの、規模は大小さまざまである。ブータン各地のゾン・寺院では、毎月10日にツェチュ法要を勤めるが、各々一年のうち特定の月を定め殊に盛大に行われる。ニマルン寺院の場合には、ブータン暦5月8日から10日の3日間にわたって繰り広げられる。(西暦では、たいてい6月後半か7月前半である。)

このツェチュ祭には、必ずチャムと呼ばれる躍動的で色彩豊かな仮面舞踊(劇)が演出される。チャムは単なる見世物としての娯楽を目的とした舞踊ではなく、意味深長な密教教義の裏づけのある儀式・法要の舞踊化といったほうが適切である。お堂の中で営まれる法要などの次第が、儀軌のなかに詳細に規定されているように、チャムの踊り手の動きは、チャム・イクとよばれる次第書のなかに一挙手一投足まで詳しく記してある。

チャムは舞踊という具象的で、一般民衆にもより親しみやすい形で、ある特定の尊格を舞台上にまのあたりに出現せしめるわけである。それゆえに法要の場合と同じように、踊り手自身が、出現せしめる尊格になりきる必要がある。チャムの仮面は、とりもなおさずこうした尊格の依代に他ならない。それゆえに、その色、形はすべて法要の儀軌に規定された通りであることが、一番大切である。同様に、踊り手の持ち物もすべて尊格の持ち物を模したものである。チャムの仮面は、一見すると何の表情もない不細工な面に思えるかもしれないが、決してそうではない。能面のように、登場人物の怨念、憂愁、悲痛といった情を表現するためにつくられた面とは、本質的にその目的・機能が違っているのである。

こうして舞台に出現する諸尊は、内には慈悲・やさしさを秘めつつも、外見は人を威嚇するような怒りたけった姿(＝忿怒相)をしている場合が多い。これは、密教のひとつの特色で、普通の穏便な手段では教化・調伏で

きない相手には、外観からして相手をひるませるような凄まじさをもって対面する必要があるからである。

この種の忿怒尊が中心となるチャムでは、まず調伏されるべき悪霊の偶像が舞台に運び込まれる。この導入部を演ずるのは、墓場の守り神・骸骨(＝ドゥルダ)の舞である場合が多い。これにつづいて、忿怒尊の面をかぶった踊り手が、プルバ(仏教儀礼で用いる先の尖った楔形をした短い宝剣)あるいは刀で、偶像を儀式的に“誅殺”する場面でクライマックスを迎える。こうして、仏教に敵対する鬼神・悪霊は調伏され、国家の、村の、そして人々の生活の安泰が約束されるわけである。チャムの圧巻シャナ“黒帽の舞”も、こうした悪霊調伏を目的としたものである。

この類のチャムは、儀式的な性格が強く、そこに秘められた象徴的で深奥な意味は、一般民衆の理解領域をはるかに超えている。それでも、一年を通じて他にこれといった娯楽もない人々は、こうしたチャムを見世物として、その仮面、衣装、演出を結構楽しんでる。しかし、チャムの中には、一般民衆にもっと分かりやすく、身近なテーマを扱ったものもあり、舞台の周りに人だかりが増え、見物人が喰い入るように眺めているのは、この部類のチャムである。

ツェチュには、こうした仏教の儀式としての、あるいは説話の戯曲化としての様々なチャムが、朝から夕方まで繰り広げられる。そしてチャムの合間には、村人による民謡や郷土舞踊も演じられる。

ツェチュ祭はその由来からいって、当然グル・リンポチュの登場で締めくくられる。グル・リンポチュを主尊に描いたトンドルとよばれる総絹アップリケ仕上げの大掛け物の開帳と、グル・ツェンギェ(グル・リンポチュ八変化相の舞)のチャムが演じられる。トンドルとは、この仏画を拝むだけで解脱が得られる、というご利益のあるもので、普通は未明に開帳されるがこの日はまだ暗いうちから人出が多い。ツェチュ祭に開帳されるトンドルは、グル・リンポチュを主尊に描いたもので、両脇にはグル・リンポチュの二人の妃、そして周囲にはグルの八変化相とかニンマ派、ドゥック派の高僧が配置してある。厳かな法要が営まれるうちに、人々はこの大掛け物の前に進み、その裾を額にいただいてグル・リンポチュの加護を、家族の無病息災を祈願する。

トンドルがしまい込まれると、その荘重・静寂さとはうって変わって、躍動的・立体的なグル・ツェンギェ“グル八変化相”のチャムが演じられる。主尊のグル・リンポチュはひとまわり大きく、他の八変化相は普通の大きさの仮面によって象徴的に演出されるこのチャムは、往時のグル・リンポチュの教化活動を、まのあたり

に再現する迫力がある。「月の10日に法要を勤める人のいるところには、必ず戻ってくる」という言葉通りの、グル・リンポチュの再来である。こうして、人々にとっ

てツェチュ祭を見物することは、師を追慕し信心をあらたにする機会でもある。

第二部

日時 1994年11月10日(木) 18:30～

場所 大谷大学講堂

チベット仏教の声明

亡命の地インドに建つギュテ密教寺から来日中のチベット人の学僧一行(6名)を招いて仏教の声明が実演された。まず初めに、本学の白館戒雲助教授によりチベット仏教ゲルク派の(特に密教の)歴史、寺院、修行・儀式などについての解説があった。その主な内容は次のようである。

チベット仏教の中心的な宗派であるゲルク派は、ツォンカバ(1357～1419年)に始まる。彼はチベット仏教中興の祖とも言われる。当時チベットでは、顕教と密教は相対立するものと考えられていたが、ツォンカバは、両者が互いに補い合うもので、顕教を修得した後に密教を学ぶべきであることを示した。彼は53歳の時、弟子たちの進言によりそれまでの遊行生活をやめ、ロリ山にガンデン寺を建て、後半生を送った。その寺は兜率天(これのチベット名がガンデン)に因んでその名がつけられた。以来、彼を祖師とする流儀は「ガンデンの流儀」と呼ばれ、それが転訛して「ゲルク」派となる。そしてガンデン寺はその総本山とされる。また、ツォンカバは、当時退廃していた戒律の教えを再興するために帽子の色を昔の戒律を厳守した時代の黄色にしたために、この流派は「黄帽派」とも呼ばれる。

ツォンカバの後継は弟子のギャザップ・タルマリシエンであるが、密教に関してはシェラブ・センゲがツォンカバの教えを受け継いだ。シェラブ・センゲは1433年に密教の専門道場としてギュメ寺を創建する。次いで、シェラブ・センゲの弟子であるクンガー・デントップが1474年にギュテ寺を創建する。この寺はギュメ寺とならぶ密教の専門道場である。現在、ガンデン寺の管長(ガンデンティバ)はギュメ寺とギュテ寺が交替で出すことになっている。

続いて、ギュテ密教寺の僧院長を初めとする5名の僧たちにより声明が唱えられた。声明は「秘密集会」の灌頂儀式と「マハーカーラ(大黒天)」のそれぞれの冒頭部分である。

(1) 「秘密集会(Guhyasamāja)」の灌頂儀式

イダム(本尊)を眼前に生起させ、その本尊より灌

頂を受ける

(i)瓶灌頂(水、冠、金剛など11種とされる)

(ii)秘密灌頂

(iii)般若智灌頂

(iv)言葉の灌頂

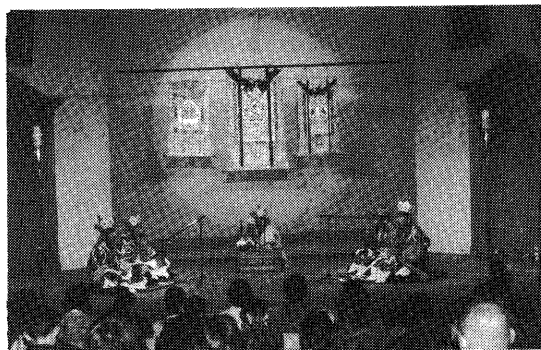
今回は、この中、最初の「水の灌頂」の部分である。

(2) 「マハーカーラ(Mahakala、大黒天)」

守護神マハーカーラを眼前に生起させ、願い事を祈祷する。

今回は、この中、「マハーカーラの生起」の部分である。

太鼓や鈴などいくつかの楽器の音と共に、儀式装束をまとった学僧たちの声明が響き始めると、講堂内は厳かな雰囲気になった。一時間余りではあったが、聴衆はその厳かさに触れえたようであった。



真宗総合研究所彙報 1994.4-1995.3

■研究所委員会

- 4月19日(火) 12時10分 博綜館第3会議室
 議題 客員研究員の件について
 5月24日(火) 14時30分 博綜館第5会議室
 議題 1994年度指定研究について
 12月8日(木) 17時50分 博綜館第3会議室
 議題 一般研究選考について

■「指定研究」会議/研究会

大学史編纂研究

- 6月17日(金) 正午 博綜館第1小会議室
 7月19日(火) 16時 博綜館第1小会議室
 10月4日(火) 正午 博綜館第1小会議室
 11月30日(水) 16時 博綜館第5会議室
 議題 『大正期真宗の諸相』
 講師 福島 和人(本学非常勤講師)

国際仏教研究

- 6月24日(金) 16時10分 博綜館第5会議室
 テーマ アメリカにおける仏教研究の現状と問題点
 講師 Smith大学 Taitetsu Unno 教授
 7月11日(月) 16時 博綜館第2会議室
 テーマ アメリカの仏教事情について
 講師 シカゴ仏教会会長 足利 祐敬 氏
 7月25日(月) 16時30分 博綜館第2会議室
 テーマ 慈雲尊者の仏教における肉体と社会化
 講師 米国 デュポア大学 Paul Watt 教授
 9月29日(木) 14時30分 博綜館第4会議室
 テーマ PUJA AND HOMA IN JAPANESE
 (SHINGON) BUDDHIST TEMPLES
 WITH INDIAN PERSPECTIVE
 講師 K. J. Somaiya Center of Buddhist Studies
 Dr. Kalpakam Sankarnarayan
 12月16日(金) 17時30分 博綜館第2会議室
 テーマ シルクロードにおける少数民族とその文化
 講師 中央民族大学 胡 振華 教授
 通訳 劉 建(本学非常勤講師)

大蔵経学術用語研究

以下の日時に研究会を開いた。

- 4月28日(木) 17時40分 第1研究室
 5月23日(月) 18時 大蔵経学術用語研究
 5月30日(月) 18時 大蔵経学術用語研究
 6月20日(月) 18時 大蔵経学術用語研究
 6月27日(月) 18時 大蔵経学術用語研究

- 7月18日(月) 18時 大蔵経学術用語研究
 10月17日(月) 18時 大蔵経学術用語研究
 12月2日(金) 14時30分 博綜館第3会議室
 12月12日(月) 18時 大蔵経学術用語研究
 12月19日(月) 18時 大蔵経学術用語研究

■学会参加/調査派遣

†第8回ヨーロッパ真宗学会

8月6日～15日までオーストリアのウィーンでヨーロッパ真宗学会第8回大会が開催され国際仏教研究班樋口章信研究員が参加した。

†AAR (the American Academy of Religion)

11月18日～27日までシカゴで1994年度アメリカ宗教学会が開催され、国際仏教研究班渡辺啓真研究員が参加した。

■客員研究員

Paul Watt

Depau University

Project Title: 日本人の身体観

Duration: 5/7～5/8 1994

Imaeda Yoshiro

Centre National de la Recherche Scientifique (CNRS)

Project Title: History and Philosophy of Tibetan world

■人事

- 1994(平成6)年4月1日付を以て研究所主事が宮下晴輝助教授から兵藤一夫助教授に交替した。
- 同年5月31日付を以て研究所事務担当の林一宗主任が退職した。
- 同年10月1日付を以て研究所所長が藤田昭彦教授から片岡了教授に交替した。

研究所報 第32号

1995年3月31日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒602 京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目

Tel. 075-212-5500 Fax. 075-212-5501